

とある暗部の異能司書

砂糖

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おっす、おら超能力者！

何か前世の記憶っぽいので鬱ってたけど妹ちゃんが出来てなんやかんやあつて今では立派なシスコン！

妹ちゃんのためなら例え火の中水の中スカートの中でも行くよ!!

今は風紀委員ジャッジメントで妹ちゃんの害になりそうなのを潰してるよ！

妹ちゃんの為なら暗いことにも手を出しちゃうよね！当たり前だよね！

この話はあらすじのようなテンションではありません。

また、この話はオリキャラが原作キャラの身内になっています。

残酷な描写などもストーリー展開上出てくる可能性があります。

この話は「とある魔術の禁書目録」と「とある科学の超電磁砲」を元にして書きたいです。(願望)

最後に、作者は忘れっぽい、勘違いしやすいなどの不良品なので誤字脱字、ストーリーの矛盾などありましたらお教え下さい。

作者の願望で原作で死ぬキャラも生きてたりします。

※4月5日あらすじの誤字脱字修正

目次

プロローグ

少年は幼い頃にとても永い永い悪夢を見たことがあった。

悪夢はとても現実的で少年の幼い心は病んでいく。

悪夢の中で少年は、この世の闇を全て詰め込んだような最悪なスラム街に住んでいるのだ。

夢の中の少年は幼くそして風に吹かれただけで吹き飛ばされてしまいそうなほどに痩せてしまっていた。

ある日少年が住むスラム街に身なりの小綺麗な男がやって来た。

男はスラム街の子供を引き取ると言って少年と同じ年の顔しか知らないようなもの達を男の屋敷に連れていく。

だが、世の中がそんなうまくいくはずもなく、連れてこられたものうち一人が居なくなっただけだと思っただけの日から次々と連れてこられたものが居なくなっていく。

ここで、少年は疑うべきだった。

だが少年はそれを気にすることは無く与えられた仕事をしていく。

ある日それは唐突に少年を襲った。

少年が屋敷に連れてこられた時から割り振られた仕事をこなしているふと、強烈な睡魔が襲ってくる。

少年は睡魔と闘ったが強烈な睡魔にはかたず、目を閉じてしまった。

その次に目を開けたときに死がすぐそこに迫っていることも知らずに。

少年は胸に焼きごてを押し付けられるような痛みで目を覚ます。

少年は声にならない悲鳴を上げ熱の原因を見る。

少年の胸にはどす黒い血の色に染まった小剣が刺さっていた。

少年はその小剣を掴む力すら出なかった。

少年が生を諦め目を閉ざした瞬間部屋中を訳の分からない力が駆け巡る。

いつの間にかいた雇い主の男が興奮したように、成功した！これで神になれる！と叫んでいた。

次の瞬間部屋の扉が荒々しく開けられたかと思うと男の体はえぐられたかのように不自然な形になり消える。

少年はついさっきまでうるさかった男の声が聞こえなくなったのが気になり最後の力を振り絞り目を開ける。

悪夢の中の少年は涙した。

そこには黄金に輝く美しい黄金のように輝く【明け色の陽射し】があつただから。

7月のあるうだるように暑い日、逃げる白い少女とそれを追いかける赤い髪の神父と一見すると痴女のような恰好の女の二人組がいた。

そして、その逃走劇をばれないように追いかけて見つけている一見少女と見間違えそうな容姿の少年がいた。

その少年は胡散臭い笑みを貼り付け、携帯電話を片手に少女と二人組の後をばれないように静かに駆けている。

「ねえねえ、荒井ちゃん。」

少年は気楽そうに建物の屋上と屋上の間を駆けながら携帯電話の向こう側にいる少女に話始める。

『なんですか、司書員さん。暗部の活動中に私のことを名前で呼ばないでください、それと私のことは機体番号マシンナンバーで呼ぶようにと何回もいつてるじゃないですか。』

携帯電話の向こうの少女は迷惑そうにそれでいて諦めたように答え少年は心から面白そうに笑いながら電話の向こうの少女に言う。

「ははっ、僕がそんな小さなこと気にするわけないじゃない。」

『はあ、期待はしてませんでしたがこのままでとは……。まあ、何時ものことですから諦めがつかますけれど…それで言いたいことがあつたのでは？』

少年の電話の向こうにいる少女は諦めたように言いながら少年に話の続きをうながした。

「あの三人の監視っていう任務だけども、正直あの三人が魔術^{オカルト}関連者ってことより赤い不良神父の方が14歳で痴女が18歳って事の方が信じられないんだけど…。それにさあ、事情を知らなかったらどう見ても彼らが悪役で白い娘が狙われてるようにしか見えないよ?」

少年がそう疑うように言うのと電話の向こう側にいる少女は少年に何回か言われたことがあるのだろう、慣れたようにどうしようもないという風に溜息をついた。

『はあ、司書員さんこれもずっと言ってますが私達は彼によって作られました。が彼の考えている事など全く分かりません、それと同じように彼の渡してくる情報の真偽を私は知らないんです。ですから完全に全部信用する訳には当然いけません、ある程度は信用するしかないですよ。』

そんな風に少年と電話の向こう側の少女が会話をしていると二人組は少女を見失って右往左往している。

「あ、年齢詐称組が白いの見失ったっぽい。」

少年がぼそりと言うと電話の向こうにいる少女は予測していたかのように次の指示をだす。

『やっぱりですか…では、少しきな臭い情報を渡したいので隠れ家にかけてください。』

そう、少女が言うのと少年が少女との会話をしている携帯電話ではない携帯電話が鳴り出し、少年はその鳴り出した携帯電話を開き着信相手を見て気まずげに言いだした。

「ごめん、多分隠れ家行けそうにないかも。」

『はあ、今回の任務はこの都市の闇を見張るべき我々が担当するのもおかしい内容でしたから、マーカーを付けただけでも良いはずですよ。それと、なんで隠れ家にこれないんですか?』

少年の発言に電話の向こうにいる少女は心底疑問そうにその理由を少年に問う。

「後輩ちゃんにサボってるのバレたっぽい。」

『ああ、風紀委員の仕事ですか。…でもまあ、適当な貴方が暗部と風紀委員の二足の草鞋なんてしている時点で私は驚きなのですけれ

どそこら辺の理由も今度聞きたいですね。』

少年が隠れ家に行けない理由を電話の向こうにいるであろう少女に言うのと少女はそれに納得し、少年に電話に出るよう促した。

『早く出ないと貴方が怒られるだけだと思えますよ。私の要件は一瞬ですみますし。』

「ははっ、だよー。じゃあ、後で情報頂戴ねー。」

少女に促されて少年は電話に出る。

電話に出ると少年の後輩であろう、可愛らしい少女のものであろう怒鳴り声が聞こえてくる。

『何してるんですか先輩っ！集合時間もうとっくに過ぎているのにどこほつつき歩いていてるんですか！』

「ははは、ごめん歩いてたらいつの間にかどっかのビルの屋上に来ちゃってさ。ところでさあ、初春はつはるちゃんういはる『ういはるですっ！』ごめんごめんそんなに怒らないでよ、ところで初春ちゃん僕がどこにいるかわかんない？」

『はあ、それ言うの何回目ですかね先輩、先輩のことですのでそう言うと思ってもう調べてありますよ。私たちがいるレストランまでの道のりを送るんでちゃんと見ながら来てくださいね。』

「はいはい。」

少年と少女が親しげに言い合いをしていると少年の携帯に少女から位置情報が送られてきた。

「初春ちゃんありがとね、今すぐ行くー。」

『先輩早くしてくださいね！』

「うんうん、わかってるわかってる出来るだけ急ぐねー。」

少女がそう言って少年を急かすと少年はおびなりに返事を返したあと電話をきり、今いるビルの屋上から一歩踏み出す。

少年は何でもないことかの様に屋上から飛び降りた。

少年が普通の人間であればひとたまりもない高さから飛び降りたのにいつまでたっても、人間が地面に追突する音は響くことなく逆に羽が落ちるかのようなスピードで少年は軽やかに地面に足をつく。

少年はすぐに先ほど少女が送ってきた位置情報を見ながら歩き出す。
「今日の晩御飯は何にしようかな、妹ちゃんが喜んでくれるといい
なあー」

少年は先ほどまでの胡散臭い笑みと違いどこまでも愛おしそうに
顔をして笑いながら言う。